

2015年度

キャリアデザイン学部自己推薦入学試験

英語

問題は1題で、16行の英文を読み、和訳をする問題でした。

英文は著作権者の許諾を得ていないため掲載いたしません。問題の概要は以下の通りです。

私たちは、多くの情報を、話を通して得ているが、実際には、書かれたものを通して情報を得る場合のほうが多い。私たちは、読む事を通じて、言わば、過去からの蓄積された知識を得ているのである。

私たちがよく話し、よく書けるようになるには、過去に人々によって書かれたものを読むのが最善の方法である。書かれたものは、人類の経験の蓄積だからである。私たちの時代は、あらゆる事がこれまでと異なる新しい時代と言われるが、それは機会的な発明の場合である。しかし人間の感情、人間の諸問題、人間の経験するものは、あまり変化していない。人間は、ディッケンズ、シェイクスピア、チャーター、さらにはキリストの時代と、ほとんど変わっていないのである。ローマの歴史を読んで、ローマ帝国が今日のアメリカとほとんど同じような状況に直面していたことを知るのは興味深い。ローマ人と同じ誤りをアメリカ人が繰り返すのであれば、ローマ人の誤りについて、それがどのようにして避けられ得たかという検証を怠ったからに他ならないであろう。

(出典)

作品名： “All About Language”

著作者名： Mario Pei

問題の関連箇所： p.121, p.122

出版社名： Lippincott Williams & Wilkins, U.S.A.

出版年： 1950

ISBN : ISBN-13: 978-0397302635

小論文 問題

次の文章を読み、第一問および第二問に答えなさい。

一般に「自立」と言えば、自分で収入を得て、日常生活を送るのに人の世話にはならないということの意味すると思われるが、その意味からすれば、重度の身体障害者の場合、完全に「自立」することは、きわめて困難である。障害のない人の生活を標準とし、それに近いことがより望ましいとする従来の考え方の当然の帰結は、障害者に自立を期待することはなく、施設(ないし家庭)に「収容」して、保護を与えるというものであった。そんな状況に基本的な疑問を持ち、人間としてもっと本来的で豊かな関係性を作ることが可能であることを、自らの生活を通して証明しようというのが「自立生活者」たちである。アメリカでソーシャルワーカーをしているカーベン・デジョンは、論文の中で、「長期の施設入所は、悪い結果をもたらすことがよく知られている」とし、さらに次のような内容の指摘をする。

身体障害者の施設には、構造的に依存性を作り出す環境がある。施設はそれだけで独立した社会システムであり、施設スタッフと各種の医療従事者は外部の介入をほとんど受けずに、実質的な社会統制を行なうことが許されている。収容された障害者は患者として扱われ、患者は指示と規律と規則に従うよう指導される。従順さが高く評価され、個人的判断に基づく行動はよしとされない。施設でなくとも、医師と患者の関係、または治療の専門家と治療を受ける者の関係は構造的に依存性を誘発し、その依存性が社会的に望ましいもの、ないし、社会的に要請されたものとみなされる傾向にある。

「自立生活」運動は、このような『患者モデル』やそのバリエーションである『障害者モデル』を拒否する。障害者は、その家庭人としての、職業人としての、または市民としての当然の責任と責務を免除される代わりに、子どものような依存関係に甘んじることを望まない」と、デジョンは主張する。

「自立生活者」が目指しているのは、「通常の考え方に基づく対等な関係」でも「支配関係」でもない、自分と社会の依存性と自立性に関する新しい価値観に基づく、いわば「尊厳のある対等な関係」である。そのような関係性が社会的妥当性を持ちうるものであり、現実的に可能であるということをもつて示しているのが「自立生活者」なのである。

「自立生活」における「自立」の意味をもっとも端的に言い表わしているのは、先ほど引用したデジョンの論文の中の、次の一節である。

「障害者が他の人間の手助けを他の人より余計に必要とするからといって、彼または彼女が他の人以上に依存的であるとは限らない。人の助けを借りて一五分かかって衣服を着て仕事に出かけられる人は、自分で服を着るのに二時間かかるため家にいるほかはない人よりも自立していると言える。」

すべてを自分でできるということが自立ではなく、自分の生活に関して、可能な範囲で、自己決定をするということ。これが「自立生活」の提示する自立の考え方である。

自分で自分の生活の仕方を選ぶということは、その結果が「失敗」に終わる可能性を受け入れるということを意味する。「自立生活」の考え方は、結局その点に行き着く。障害者であるからといって、人間としての可能性をはじめから切り取ってしまうという考え方を拒

否するということだ。再び、デジョンの論文から引用しよう。

「リスクを冒すことの尊厳。それが『自立生活』が目指すものそのものである。失敗の危険性がなければ、障害者は真の自立を得たとはいえないし、人間性の本質の印——結果が良きにつけ悪しきにつけ自分で選択するという権利——を持つていないことになる。」

進んでリスクを引き受けるといことは、自らを危険にさらすことであり、われわれがこれまで用いてきた表現を使うなら、「自分自身をバルネラブルにする」ということである。たしかに、日常生活を送ることでさえ自力ではできない重度身体障害者が独り暮らしをするということは、自分をバルネラブルにすることの「極み」である。

自らをバルネラブルにすることに関しては、「報酬」の保証がないときに「まず、自分から動く」ことを行動原理とするボランティアと基本的に共通するものがある。すなわち、表層的にみれば、ボランティアが「自立生活者」を一方向的に助けているのであるが、実は、お互いの行動の基本は共通した価値観で結ばれているのである。

「自立生活」の考え方は、障害者だけでなく、われわれすべてにとつてきわめて重要な意味を持つものである。というのは、社会に依存しているということに関しては障害者を持つ者も持たない者も——程度の差があるだけで——同じであるからだ。人は生まれながらにして巨大システムに取り込まれ、否応なく社会に対する依存関係の中に放り込まれている。障害のないものであっても、自分がまったく独力で生活しているなどというのは妄想に過ぎない。だれでも、常に、多くの他人に間接的に依存しているのだし、ときには隣の人や友人の直接的な手助けを必要とする。

社会の提供するものに、必要に応じて依存しながらも自立性を獲得するということが、そのためには、保護を求めめるのではなく、自分からリスクを冒すことを存在の尊厳とするということ、そのこと自体が自分の存在の本当の意味——自分の存在の一部だけを切り取られることのない、本来的に備わっている存在に関するすべての複雑性と豊かさを伴った人間としての意味——を見つけることであるということ、を、「自立生活」の考え方とその実践は、力強く示しているのである。

(注) バルネラブルとは、「ひ弱い」、「他からの攻撃を受けやすい」ないし「傷つきやすい」状態を表わす。

(出典：金子郁容『ボランティアもうひとつの情報社会』岩波新書、一九九二年。なお、文章の一部を省略してある。)

第一問 本文中で示されている「自立」の意味について、二〇〇字以内でまとめなさい。

(縦書き。句読点も字数に加える。)

第二問

傍線部に関連して、「自立生活」の考え方は、あなたのこれからの生き方にとつてどのように重要な意味を持つだろうか。具体的な例を挙げながら、三〇〇字以内で述べなさい。(縦書き。句読点も字数に加える。)